

第四百一回 青葉会

令和元年九月二十六日(木) 午後一時半〜四時半 文京区民センター会議室

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯
山内天牛

〈投句〉

伊賀山そらお 小早健介 在間千恵 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明 古田昇
星田啓子 宮内規雄 山崎亜也 山田けい子 渡邊盛雄
赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 重枝孝岳 庄司龍平 高梨由美子 高橋敏郎
早川允章 村田くに子 山本三恵

〈紙上選句〉

《互選句》

九点

◎ 秋日濃し尺に足らざる瞽女の墓

一灯 (眞・孤・五・弘・敏・允・く・天)

(三)

(類句・類想句あり。選句にも要注意。川合絹漱先生は厳戒されておられました)

六点

◎ 鋭角に陽の射すあたり曼珠沙華

啓子 (紀・猛・孤・由・ゆ・三)

五点

◎ 会津駅冷酒二合の雨宿り

忠彦 (弘・敏・灯・く・天)

見舞ひしてすぐの訃報や稲光

全 (眞・紀・猛・弘・敏)

◎ 蕎麦の花八ヶ岳(ヤマ)の裾野を白妙に

一灯 (堅・猛・孤・ゆ・允)

播磨屋一門の「沼津」

四点

◎ 秋深く芸の高みに吉右衛門

紀久男 (五・敏・允・天)

◎ 満月が追いかけてくる帰り道

猛 (眞・忠・孤・天)

◎ 野分中「昼の憩い」のテーマ曲

恵洲 (忠・孤・五・龍)

◎ 風過ぎてより揺れ止まず吾亦紅

一灯 (孤・五・孝・く)

◎ 蛸やホスピスの灯の薄明り

全 (孤・ゆ・允・く)

◎ 秋立つやクロワツサンのさくさくと

正明 (紀・忠・孤・弘)

クリスタルの光彩まるぶ芋の露

昇 (紀・孝・灯・く)

月明に青墨(あおすみ)の雲輝けり

亜也 (紀・孝・灯・由)

三点

◎ 鶏頭の前に人立つ子規の庭

弘子 (允・天・三)

◎ 秋雀手の窪ほどに砂浴びる

全 (由・く・三)

◎ 再検査告げられし夜のきりぎりす

健介 (眞・孤・弘)

酌み交わす出湯の座敷月の影

ゆたか (堅・紀・允)

屋根葺きの細き梯子や秋の空

正明 (眞・忠・弘)

厨から稲光見る句の世界

天牛 (紀・龍・三)

くるあげは羽化しそんじて歩みある

全 (孝・ゆ・灯)

(黒揚羽を平仮名にしたのは羽化とダブる為の由)

路地裏に蟲の声聴く北新地

盛雄 (敏・ゆ・灯)

二点

溪流に子等の声満ち秋晴るる

そらお (紀・灯)

肉弾戦酒量の増ゆ秋ラグビー

紀久男 (忠・龍)

秋刀魚瘦せ漁れて庶民に高級魚

忠彦 (堅・紀)

火葬場に猪(し)熊蛇出る秋会津

全 (紀・天)

◎ 胸深く稚(やき)抱く母や秋日傘

弘子 (忠・孤)

能面の下の猪首や秋暑し

恵洲 (堅・五)

秋澄むや歌姫三たびアンコール

堂哉 (眞・紀)

朝顔や蔓伸び来たり二階まで

ゆたか (龍・敏)

大関へ復帰の矜恃天高し

盛雄 (紀・五)

一点

首都打ちし台風を連れ友逝きぬ

そらお (紀)

秋暑し妻の呆けやう気がかりに
 極上の新酒おかはりジャズライブ
 ヒガンバナ無償で花蜜与えをり
 蝸や闇の森から叫びをり
 田に接し蕎麦の花咲く会津かな
 少しづつ気力も戻る秋彼岸
 糸瓜棚強き風にも抗ひぬ
 昼の陽の輪郭大き稲の花
 やうやうに細き秋刀魚の売られをり
 ああ秋刀魚今年は鯛と張り合えり
 戸開ければもう爽やかな朝のあり
 花野行くせせらぎを跳び柵を越ゆ
 裸灯の夕餉や柚子の香に思ふ
 高級魚となりぬ不漁の秋刀魚買ふ
 ちりりんと名残の風鈴裏の路地
 渋谷すら摩天楼となり鯛雲
 ◎ 柿喰へばかきかきかきと音すなり
 行きつけもチャンと寄付して秋祭
 人住まぬ家に大きな金木犀
 人去りて軍艦島や鯛雲
 炎ゆる道姪の車に拾はるる
 蟻螂は恐竜の仔ぞ雄を食ふ

紀久男 (猛)
 全 (忠)
 猛 (龍)
 全 (三)
 忠彦 (堅)
 五郎太 (紀)
 全 (忠)
 弘子 (ゆ)
 全 (紀)
 千恵 (堅)
 全 (紀)
 堂哉 (孝)
 一灯 (孝)
 昇 (猛)
 啓子 (猛)
 全 (紀)
 規雄 (孤)
 亜也 (紀)
 けい子 (紀)
 全 (紀)
 天牛 (龍)
 盛雄 (紀)

●次回青葉会

十月二十四日(木) 午後一時半～四時半 文京区民センター会議室
 ▲当季雑詠各自五句 投句は二句
 十一月二十八日(木) 全

令和元年十月十日

以上 文責 紀久男

令和元年九月 青葉会報

一 今回は弘子さん始め8名出席。投句は正明さんから12名。孤舟選者は結社の全国大会で欠席。いつもの猛さん進行役で御覧の通り一灯さん、啓子さんが高得点でした。

四百回記念句会に頂戴したゲストの大谷真為さんからクツキー、名古屋のけい子さんの海老煎餅、大阪の堂哉さんの宇治茶クツキー・煎餅、そして小生の菊正宗生酒を賞味し乍ら、
 ①眞希子さんのFAX②「森の座」9月号(弘子さん、陽亮さんの作品への句評掲載)③正明さんのハガキとFAX④己之助からの礼状⑤ゲスト真為さん、中臺さんの礼状⑥急逝された新居田政司さんの奥様からの手紙⑦孤舟選者のハガキ⑧龍平さんの社友会HP寄稿文などを回覧しました。

話題は社友会ビアパーティでの社長挨拶と最高齢出席で天牛さん紹介(紹介されませんが、一年次下の清水宏員さん、鶴岡忠成さんもお元気で、人気者)。そして「400回記念合同句集」に各自20句募集。11月末締め切りで年明け上梓を目指すこと等。

二 関係者近詠

休肝日の夫あどけなく瓜の花	眞希子	花桐や万葉文化今に生く	全	盛雄
軒深く韓表札と燕の子	全	万葉の古書に脚光風薫る	全	
左利きとゴム手分かちてトマト畑	全	アリバイを残す道すじ蝸牛	全	
羽蟻の禍遠き遺産の実家訪ふに	全	就活の若き体臭栗の花	全	
宮雀勁く飛び立つ梅雨晴間	弘子	国捨てて難民の群れ蟻動く	全	
梅雨葵赤子足から泣き出しぬ	全	ポール蹴る少女の動き夏の蝶	全	
ここいらはみな竹箒額の花	全	—— 毎日新聞兵庫文芸	全	若森京子選 (七〇九月)
父子して指す夏星や家近し	全			
癒ゆるなきやまひの床にころもがへ	青史	故里の海静かなり秋彼岸	全	允章
夏みまひ往来淋しき世過ぎかな	全	波音の幽かに墓を洗ひけり	全	
わが生に半ば王手かこの溽暑	全	脳髓も目玉も真つ赤夾竹桃	全	昇
監視カメラ葉裏へ急ぐ蝸牛	全	やんま飛ぶ好天の原爆ドーム	全	
海老蔵の汗の奮闘空しけれ	紀久男	雨脚のしばらく止みて鉦叩き	全	堂哉
口直しの水の美味しさどぜう鍋	全	ランデブー 银杏並木引返す	全	

「森の座」 10月号

逃水の中へ中へとレースカー
 巻尺のつるんと戻る日永かな
 米粒は涙のかたち粽結ふ
 瀬をのぼる姿のままに串の鮎
 鈴蘭に月の雫の宿りけり
 —— 「爽樹」 9月号



三 400回記念祝宴にて回覧しましたゲストの中臺誠一さん手造り和綴「さんもく集」20
 18年版より小生好みの作品を抄出してみました。

やや寒し方向音痴に案内図	全	下鉢清子（俳人協会名誉会員）
在りし日の清方画室そぞろ寒	全	中臺誠一
下浚ひ小劇場の柿紅葉	全	桂南なん
秋風や海辺の街のキルト展	全	
赤とんぼ乗り降り無し山の駅	全	

四 「樂屋句會」御常連の平澤好宏（俳号・騎風）さんより新ばし月例句会八月の成績を披露して貰いました。兼題「手」「熱風」

隅田川火花が風を引いて行く	全	新ばし小喜美	「天」
遠雷や手酌の人の無口なり	全		「地」
飛ばしても熱風浴びるバイクかな	全	平澤騎風	「地」
愛犬の命日であり広島忌	全		「地」

五 「きさらぎ句会」の選者川崎雅子より、主宰されている「とちの木俳句会」の句集第43号（9月10日発行）入手しましたので主宰の10句を御紹介します。

死なないで！夏布団はぎ母を抱く	汗つかきの母へこの世の風送る
逝きし母に夏布団をかけ直す	母の遺せしものアツパツパにも名前
風鈴や恐れぬし死の呆気なく	どれが母の星ぼんやりと梅雨の星
死後といふ刻のはじまる短き夜	おろおろと六月の日々やり過ぐす
走り梅雨骨となりても母であり	母に来る郵便の絶え半夏生

令和元年十月十日

紀久男記